

序文（一八四八年）

この分野には、すでに評価に値する著作が数多くある。それにもかかわらず、本書のような論考が刊行されて世に出る以上、その趣旨についてある程度の説明が必要だと思われるだろう。

おそらく、現存する政治経済学のどの著作にも、この学問の理論に近年加えられた最新の改良が十分な形で取り入れられているとは言えない、と述べるだけで足りるだろう。ここ数年、とりわけ通貨、対外貿易、そして植民と多少なりとも密接に関わる重要な論題をめぐる議論によって、多くの新しい発想とその新しい応用が引き出されてきた。そのため、これらの思索の成果を取り込み、先人の最良の論者がすでに打ち立てた原理と調和させるには、政治経済学の領域全体を改めて一望し直す理由があるようと思われる。

ただし、同じ題名で従来刊行されてきた著作に見られるこれらの不足を補うことは、著者が念頭に置く唯一の目的でも、また主要な目的でもない。本書の構想は、アダム・

スミスの著作以後にイングランドで刊行された政治経済学のいかなる論考とも異なつてゐる。

この著作の最大の特徴は、原理をつねに具体的な応用や適用と結びつけて論じ、示している点にある。一般原理の説明だけなら同等、またはそれ以上と評される著作があつたとしても、この点で本書は決定的に異なる。この姿勢だけでも、抽象的思弁の一分野としての政治経済学に含まれる以上に、より広い発想と多様な論点を取り込むことになる。実務の観点から見ると、政治経済学は社会哲学などの諸分野や他領域と切り離せない。細部の問題を除けば、最も純粹に経済問題に見える課題でさえ、経済学的前提だけで結論を出せるものはほとんどない。アダム・スミスはこの事実を見失わず、つねに念頭に置き、政治経済学を適用する場面では純粹理論を超えて、純粹な政治経済学だけでは得られない判断材料や判断要素に繰り返し言及し、それらを拠り所とした。だからこそ『国富論』は、原理を実務や実践に用いる際の確かな手応えと、事柄を掌握しているという堅固な感覚を読者に与え、一般読者に広く受け入れられただけでなく、実務家や立法者の思考にも強い影響を与えて深く浸透した。

アダム・スミスの狙いと問題意識、そして基本構想を受け継ぎつつ、現代において広

3 序 文 (一八四八年)

がつた知見や改良され洗練された考え方によらしてそれらを組み直し、刷新した著作を著すことこそ、いま政治経済学に求められる貢献である。『国富論』は多くの点で時代遅れとなり、全体としても完成度が十分とはいえないが、政治経済学はスミスの時代以来、未成熟な段階をほぼ脱するまでに発展し、彼が主題と切り離さずに論じた社会哲学も、なお発展途上ではあるものの、彼の到達点を越えて前進してきた。それにもかかわらず、彼の実践的で現実に根差した議論の進め方を、その後に蓄積され拡充した理論的知識と結び付けたり、社会の経済現象を現代における最良の社会理念や望ましい社会観との関係の中で示したりする試みは、まだ十分になされていない。目指すべき方向は、彼が自らの時代の社会哲学を踏まえて大きな成果を上げたのと同じであり、その流れに沿った再構成が必要である。

本書の著者が終始指針として念頭に置いてきたのは、先に述べた発想である。それを完全な形でなくとも部分的にでも実現できれば、それだけで十分に有益な成果であり、失敗のおそれを含むあらゆるリスクを進んで引き受ける動機となる。もっとも付け加えるべきこととして、著者の目的は実践にあり、主題の性質が許す限り一般の読者にも届くよう平易さにも配慮するが、そのどちらの利点も厳密な科学的推論を犠牲にしてまで

得ようとはしていない。著者は本書を政治経済学の抽象的な学説の單なる解説にとどめたくはないが、同時に、そのような解説も本書の中に含めたいと考えている。

第二版での変更点（一八四九年）

今回の版で加えた修正や変更は全体として大きなものではないが、本書の執筆以降、社会主義をめぐる論争の重要性が以前にも増して高まってきたため、これを扱う章を拡充することが望ましくなった。とりわけ、本書で述べた反論は、一部の社会主義者が提案した具体的な制度案や計画案に対するものに限られるにもかかわらず、それが「社会主義」と呼ばれる考え方の範囲全体を一般的に否定したものだと誤解されてきた点は見過ごせない。社会主義を十分に評価し、そこから提起される論点や問題群の全体像を適切に捉えることは、別の著作として独立に試みるのが最も有益である。

第三版での変更点（一八五二年七月）

本版では全体を改訂し、幾つかの章には大幅な加筆を施し、あるいは全面的に書き改めた。たとえば「小作農制度を廃止する手段」の章について言えば、そこに盛り込んだ提案はアイルランドだけを念頭に置いたものであり、しかも、その後の出来事によつて状況が大きく変わる前の当時のアイルランドを前提としていることを踏まえて読まねばならない。第三巻第一八章で述べた国際価値の理論にも、補足の説明を付け加えた。

「財産」を扱う章は、ほぼ全面的に書き改め、広く知られた社会主義の諸構想に対する異議を整理した。しかし、これを、人類進歩の最終段階としての社会主義そのものを否定する趣旨だと受け取られるのは本意ではない。今回の版で重視した異議はただ一つで、人類一般、とりわけ労働者階級は、いまなお十分に準備ができておらず、高度な知性と徳性のいざれをも相当に要求するような社会の仕組みに対して、現時点ではきわめて不適格だという点である。社会改良の最大の目的は、教育と訓練によつて人々を陶冶し、

最大限の個人の自由と、現行の財産法が目指してすらないない労働成果の正当な配分とを両立する社会に適応できるようになることがある。精神面と道徳面の成熟が達成されたのちに、現在とは大きく異なる形の個人財産制を選ぶのか、あるいは生産手段の共同所有と生産物の統制された分配を選ぶのかは、どちらが幸福により適し、人間性をより高く完成させるかという観点も含めて、その時代の人々に委ねればよく、現代の人々には、それを判断するだけの力が十分に備わっていない。

「労働者階級の将来」を論じる章は、本書初版刊行後にフランスの協同組合がもたらした経験の成果を取り入れて補筆し、記述の範囲も広げた。その重要な経験が示すのは、歐州の民主的運動が中傷されていた当時には成功しえなかつた規模と速度で、労働者の結社をいまやより大きく、より迅速に拡大できる時機が熟しているということである。民主的運動は目前では粗暴な暴力の圧力によって抑え込まれているが、将来の改善の種は各地に広く撒かれている。私は、これらの結社を社会変革の第一歩と位置づけ、その変革の向かう傾向をより明確に示すとともに、協同組合の大義を、支持者がしばしば口にする競争への誇張された、あるいは全く誤った糾弾から切り離して論じようと努めた。

第四版での変更点（一八五七年）

現行の第四版では、全体にわたり改訂を施し、必要と認めた箇所には補足説明を加えた。とくに加筆が多かったのは、「信用が物価に及ぼす影響」および「兌換可能な紙幣の規制」を扱う章である。

第五版での変更点（一八六二年）

本書の第五版は全編にわたり改訂し、いくつかの主題については前版よりも新しい時点まで事実を更新した。必要と判断した箇所には論拠の補強や具体例を追記したが、全体としては概して長くならないようにした。

9 序文（一八四八年）

第六版での変更点（一八六五年）

今回の改訂版も、従来の各版と同様に全編を見直し、必要と判断した箇所には補足説明や新たに示された異論への回答を挿入したが、概して分量が大きく増えることは避けた。加筆が最も多いのは金利を扱う章であり、そこで盛り込んだ新しい内容の大半と、細部にわたる小さな改善の多くについては、現存する政治経済学者の中でも最も科学的な一人である友人ケアンズ教授の提案と批評に私は負っている。

人民版での変更点（一八六五年）

本版は第六版を忠実に書き起こした。ただし、外国語で示された引用文はすべて、また外国語の語句の大半は英語に訳し、不要または冗長と判断したごく少数の引用、または引用の一部は削除した。さらに、付録として付していた、フランスの土地所有の実情をめぐる『クオータリー・レビュー』との旧来の論争の再録は省いた。

第七版での変更点（一八七一年）

本版は、文言を一部改めたほかは、前回のライブラリー版および人民版と内容が全く同じである。両版の刊行後、需要と供給の理論、ならびにストライキと労働組合が賃金に及ぼす影響をめぐって有益な議論が重ねられ、これらの問題への理解は深まったが、著者の考えでは、その成果はなお政治経済学の一般的な体系書に組み込める段階には達していない。これと同様の理由により、近年の法改正によってアイルランド土地法が改められた点についても、同国の経済制度における最大の実際上の弊害に対処しようとする善意の試みがどのように作用するかについて、経験が判断を下せるだけの時間が経つまで、ここでは言及を控える。